

『ぼくはイエローで ホワイトで ちょっとブルー』

その（２）

（ブレディみかこ）



安部
光堯
Kouichi Abe

又、長くなりました。

ブレディ (Brady) みかこという女性は
（以下、愛着を込めてみかこと言います）、
中々ボランティア活動が好きな人の様である。

この「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」
と言う本は、
ボランティア活動に対する愛着とイギリスにおけるその
重要性を書いている部分もある。これを少し紹介したい。

みかこは、「ユニフォームブギ」という章（100頁）で、
次のように書き始める。

「息子が元底辺中学校に入ってからというもの、
私はボランティア活動がしたくてうずうずしていた。
英国の公立小学校は、保護者のボランティア活動によっ
て成り立っていると言っても良い。

特に、2010年に政権を握った保守党が、悪名高き緊縮財
政政策を始めてから、教育への財政支出が毎年これでも
かこれでもかと言うほどカットされ続けており、

教員の数が減らされ続けている状況下では、保護者の協
力なくして小学校は運営できない。



遠足、プール、競技大会など、大勢の子供たちを学校の外に移動させる時、または学校の中で大きなイベントがあるときも決まって保護者が駆り出される。

だが中学生ともなると生徒たちは自分でいろんなところに移動できるし、引率や監視役も教員で事足りる。だから保護者ボランティアは必要なくなる。

でもみかこは、何かないかと探してみるとみかこの好きな音楽部だけはボランティアを募集していた。」

「所が、そこは、希望者が多く保護者がボランティアの空き待ちリストに名を連ねている状態だった。

しかも応募者は、1990年代にアルバムをリリースしたことのある元バンドマンや地元では有名な楽器店のオーナーさんとか玄人ぞろいだったので素人の私は諦めた。」

「で、その代わりと言ってはなんだが、制服のリサイクルを行っている女性教員と保護者たちのグループを手伝うことになった。このリサイクル活動は、中古の制服を保護者たちから募り、日本円で言えば50円とか100円とかで販売していて、寄付された制服がほつれていたり、破れていたりすることがあるのでそれらを繕う人を募集していたのだ。

制服リサイクルの担当をしている女性はブルネットの髪の一部に紫のメッシュを入れて、生徒たちからミセスパープルと言うニックネームで呼ばれている先生であった。その先生と親しくなったみかこは以下のような話を聞いた。」

『ここの地域は、制服を買えない生徒たちが大勢いるのよ。このリサイクル活動を始めたのは、つんつるてんの制服を着てる子や、びしょびしょの制服を着てくる子が目立つようになったからなの。ちょうど5、6年前になるかしら。大きなサイズの制服が買えなかったり、制服が1着しかないから、洗濯して乾いていなくても着て来なきゃいけない子供たちが出てきたのよ！一体いつの時代の学校なんだと思ったのよ。』



「前の労働党政権は、英国から子供の貧困をなくすといった。人々はそんなことは絶対に不可能だと笑ったが、実際に 1998 年から 99 年度には 340 万人だった貧困層の子供の数が 2010 年には 230 万人になり、子供の貧困は順調に減少した。」

ところが 2010 年に政権を奪回した保守党政権が大規模な緊縮財政を始めてからその財政支出削減の影響がダイレクトに貧しい層に現れ、2016 年から 17 年度では、平均収入の 60%以下の所得の家庭で暮らす子供の数が 410 万人に増えていた。これは英国の子供の総人口の 3 分の 1 になる。」

「でも本当は制服だけじゃない。女性の教員の中には生理用品を大量に買って女生徒に配っている人もいる。私服を持っていないから私服参加の学校行事に必ず休む子もいて、スーパーでシャツとジーンズを買ってあげたこともあった。」

「もう授業やクラブ活動のためだけに学校予算を使える時代じゃない。貧困地区にある学校は、子供たちの生活というか基本的な衣食住から面倒を見なければいけない。」

「①バス代がなくて学校に来られなくなった遠方の子のために定期代を払った教員の話、②素行不良の生徒を家庭訪問した教員がその年に全く食べ物がなくなったことに気づいてスーパーで家族全員のための食料を買った話、③ソファで寝ている生徒のために教員たちがカンパしあってマットレスを買った話。④仕事を探している移民の母親たちのために履歴書の書き方講座を開いた教員や、⑤移民局との間に立って移民の家族の代わりに手紙を書いたり、電話で抗議している教員もいると言う。」

「貧困地区にある中学校の教員は今やこんな仕事までしている。」

「この国の緊縮財政は教育者をソーシャルワーカーにまでしてしまった！」



「ミセスパープルに賛同する女性教員たちと母親たちが始めた制服のリサイクル活動は、50円から100円で制服を売ることが目的で行われているわけではない。制服が必要な生徒を知っていたら、販売会まで待たずともその子にあげていいよと言われた。」

みかこが、その時、真っ先に思いついたのは息子の友人のティムだった。入学当時から知りあった息子の友達ティムは、『チャヴ』と言う無礼で粗野な振舞いに象徴される下層階級の若者（44頁）で、入学の日から、夏休みはずっとお腹が空いていたと言った子である。

小柄でガリガリに痩せていて、4人兄弟の3番目で、母親はシングルマザー、すぐ上のお兄ちゃんは、学食で万引きばかりやっている、一番上のお兄ちゃんは、ドラッグやりすぎて死にかけた事があるということだった。みかこは、そのティムが学校帰りにうちの息子と一緒に歩いている姿を見かけた。

みかこは、彼の制服のトレーナーがずいぶん年季が入った感じに変色し、ズボンの裾が全てギザギザになっていた。みかこが、週末にミシンで作業していると、息子が、『母ちゃんが、縫っている制服は、僕が買うことが許されるの?』『でもあんた制服は2枚持っているじゃん。なぜいるの?』『いや僕じゃないんだ、友達にあげたいんだ。』母子は、思いがティムのことであることに気づいたが、ティムにどう言う風に切り出し、どういう風に渡せば良いか、わからなくなった。

息子は、学校に持って行って渡すのはちょっと難しいと思うよと言った。じゃあリュックの中に入れておいて帰り道で2人になった時にパッと渡せばと提案すると、息子はそれもなんとなくわざとらしいとか言う始末で、善意の始末に困ってしまった。

ある日、ティムが息子と一緒に自宅に来てしまった。ミシン作業をしていたみかこにティムは制服の山に目を止め、『なに、これ?』と驚いた。息子は、『母ちゃんが制服のリサイクルを手配を手伝い始めたんだ。ほらミセスパープルがやってるやつだよ。冬の制服合ったら持って行っていいよ。』



すると話していると、
突然ティムの母親から電話がかかりティムは、慌てて帰ろうとした。
その時 息子は、突然、『君は僕の友達だからね』と言って、
福砂屋の紙袋の中に制服を入れてティムに渡した。
ティムはチラリと中を見て『サンクス』と言った。
『バーイ、また明日学校でね。』

「玄関の脇の窓から、シルバーストーンの小柄な少年が、
高台にある公営住宅に向かって
紙袋を揺らしながら坂道を上っていく後ろ姿が見えた。

途中、彼は右手の甲で両手を擦る両眼を擦るような仕草をした。
彼が同じことをもう一度繰り返した時、
息子がポツリと言った。『ティムも母ちゃんと一緒に花粉症なんだよね。
晴れた日は辛そう。うん今日マジで花粉が飛んでる。
今年で1番ひどいんじゃないかな。』

「息子はいつまでも窓の脇に立ち、ガラスの向こうに小さくなっていく
友人の姿を見送っていた。ティムの手元でぶらぶら揺れている
日本の福砂屋のカステラの黄色い紙袋が
初夏の強い光を反射しながらテカテカと光っていた。」